



昭和十六年に太平洋戦争が始まると、父は家族一同を連れてご先祖の墓へ行き、「この戦争はきつと負ける。みんなは今から決死の覚悟をせよ。」と言った。父の洗脳のお蔭か、私達子供は何も恐れることなく、その言葉に従った。

二年経って私は中学二年生になった。学校（京三中）は進学校として伝統のある学校だったが、その頃の進学率というのは軍関係の学校を指していた。一年生二年生は陸軍幼年学校へ行く。二年生三年生からは少年志願兵として色々な学校を目指した。四年生五年生となると、一般の高等学校（京都では良く出来る者は三高へ行く）だけでなく、海軍兵学校や陸軍士官学校を志願した。先輩が休暇などを利用して後輩を勧誘に來ると、その凛々しい態度やスマートな服装にみんな憧れた。その憧れに釣られて、私も志願したいと考えた。

その時、父は「兵学校や士官学校は将校を養成するところである。碌を食んで、殺しを生業とするような生き方はいけない。」と言った。それで私は陛下のため、国のため、命を擲って醜の御桶となるために兵という身分を選び、当時最も必要とされていた海軍飛行兵を志した。募集要項を見ると、実戦に一番早く役立つのは甲種予科練であった。かくして昭和十九年六月（中学三年生一学期）、私は土浦海軍航空隊に入隊した。

両親は「万歳、万歳」で送り出してくれたが、自室の壁には「入

隊の日まで後〇〇日」と書かれていて、そのカウントダウンは悲痛な響きを持っていた。

終戦になり、私は敗残兵となった。厚木基地に不穏な空気があり、海軍の蹶起が伝えられたりして、私の復員は八月二十七日になった。同じ京都から来ていた戦友が家族と連絡が取れたとか、とれていないとか、いろいろな情報を知ったかぶりして触れ回っていた。私は動転していて、家へ連絡しなかった。家に電話がなかったせいもあり、連絡の方法などなかったのではないか。

いよいよ復員の日が来た。常磐線の上りに乗る者数名と一緒に土浦駅のプラットフォームにいますと、突然敵の艦載機（ロッキードだったかグラマンだったか）が低空でやってきて我々を威嚇した。

それから東京へ出たが、乗る列車の当てもなく困り果てていたら、駅のアナウンスが品川から貨物列車が出るので、復員兵は乗れと言っている。重い海軍の衣囊を担いで品川まで線路を歩いた。

待っていたのは長い長い貨物列車だった。あてがわれた無蓋貨車には陸軍の兵隊が大勢乗っていた。片隅を譲って貰い、坐った。廻りの兵隊は皆おじさんだった。彼らはみんな缶詰を持っていて、一人が珍しい餅の缶詰を開けて振る舞ってくれた。

そして家に帰ることを心から喜んでいた。また別の一人は「こんな可愛い少年をしかも長男を戦に送り出すなんて、何という親だ」と言った。丹那トンネルあたりから雨になった。貨物用の防水シートがあつたので、みんなで引つ張って被って寝た。そして何時間かして雨は止み、月が出た。そこはもう琵琶湖だった。

午前四時、いよいよ京都に着いた。駅は灯火管制のための黒い幕がまだ張り巡らされていて、真っ暗だった。改札口を出ようとした時、一つの影が近寄り、私を呼んだ。父だ。私はびっくりした。恐ろしかった。帰る日を知らせず。こっそり帰ってきたのに、どこで情報を得たのか、今日あたりと見当をつけて迎えに来ていたのだ。まだ初発の市電もない時間なのに。父は抱かんばんなりに私の復員を喜び、持参の弁当を食えとすすめた。聞けば母や弟妹も時間を交替して迎えに来ていたという。

私は何を考えていたのだろう。敗残兵となつて、皇恩にも報いず、敵を一人だもやつつけず、おめおめと帰ってきたのだ。厳しい父にどんなに叱られることかと恐れていた。

「親心、子を持ってみて、泣いてみて」今、私は七十六才になり、孫があのかの時の年齢になっている。戦争とは何か。尽忠とは何か。親とは何か。命とは何か。その他あれこれと考えている毎日ではあるが、胸の内はひたすら「反戦・平和」です。